日本工業大学
駒場高等学校卓球部
発行責任者：平　　雅行
平成２８年９月２５日発行

卓球部通信「照一隅（しょういちぐう）」No.240

・私学大会の結果

団体戦 Ａチーム 5 回戦進出　　ダブルス 6 回戦進出（ベスト 32）細見（3A）・栗山（3E）組

シングルス　6 回戦進出 2 名（ベスト 64）中山(1E)、大場(2P)

８月２３日(火)～２５日(木)の３日間、第６４回東京私立中学高等学校卓球選手権大会が東京体育館行われました。本来であれば２２日（月）から行われる予定でしたが、台風の影響で３日間に短縮し、試合も３セットマッチで行いました。今年も明大中野、明大明治、高輪、堀越、東海大高輪台、日駒の生徒が朝早くから３５００人以上の参加者を、暑い中１時間以上体育館の前で誘導している姿を見て感心しました。

初日は団体戦でした。５チーム出場して３チームが初戦を突破しました。Ｅチームは初戦の聖徳学園Ｂに対して惜しくも２対３でした。１番の塚田(4C)が２－１、４番の野上(1H)が２－０で勝ちラストの髙田(2P)勝負となりました。髙田は全力を出しましたが、惜しくもセットオールデュースで敗れてしまいました。しかし、応援も盛り上がり団体戦らしかったです。Ｃチームは初戦の２回戦、麻布Ａに対して３対０で勝利。３回戦は東海大高輪台Ｃに０対３で敗れました。Ｂチームは初戦の２回戦、青稜Ａに対して３対０で勝利したものの、３回戦の昭和第一学園Ａとの試合では力及ばずに０対３で負けてしまいました。Ａチームは順調に５回戦に進出しましたが、東海大菅生Ｃに１対３で敗れてしまい、２年連続のベスト１６進出はなりませんでした。

また、２日目の午後にシングルス（日駒からは２２名出場、４回戦敗退２名、５回戦敗退２名、６回戦敗退２名）の４回戦までが行われました。中でも盛り上がったのは３回戦の田邊(3I)の試合です。安田学園のシード選手を相手に１セット目を選手し、２セット目を逆転で奪い２対０で勝ちました。田邊は続く４回戦も勝ち、私学大会では初の５回戦進出でした。そして、１年生の武井(1T)、２年生の中山(2E)と大場(2P)も順調に勝ち上がり５回戦に進出しました。最終日の３日目はシングルスの５回戦から行いました。武井は明大八王子のシード選手に対して１セット目を奪い、２セット目もマッチポイントを奪いましたが、あと１点が遠く惜しくも１対２、しかし、中山と大場は勝ち６回戦（ベスト６４）に進出しました。中山は昨年に引き続き２年連続のベスト６４です。６回戦では中山が０対２、大場が１対２で２人とも負けてしまいましたが、どの生徒も夏休みの成果が出たと思います。

シングルスの後に行われたダブルスでは、３年生の細見(3A)・栗山(3E)組が大活躍。４回戦までは全て２対０、５回戦では１セット目を落としたものの、逆転で勝ち、初の６回戦進出、ベスト３２に入りました。また、佐々木(2P)・矢島(2E)組もよくがんばり、苦しい試合をものにして初の５回戦に進出しました。また、４回戦には中島(2T)・白石(2H)組と武井(1T)・中田(1I)組が進出しました。

今年の夏休みも多くの学校と練習試合をさせてもらいました。この経験をこれからの学校生活・卓球生活に活かしてほしいと思います。

もう一段階、一緒に上を目指しましょう。

・私が読んだ本から「今、ここを生き抜く」― 明治大学野球部監督・島岡 吉郎の遺言（大溪 弘文さん）より

精神力の培養は心のキャッチボール ― １０００球ピッチング

明治には島岡流一０００球ピッチング練習がある。投げれば投げるほど肩が強くなり、連投が利く強靭な肩が出来るという考えです。これは御大の明治高校監督時代にコーチとして招聘した早大・谷口五郎さん（釜山商－早大）の示唆が大きいと言われています。なぜ、宿敵早稲田のＯＢ選手をコーチに招いたのか。いろいろな見方があるでしょうが、思いつくもの二つほどを挙げてみます。一つは「どこの所属であろうと、良いものは良い」という御大のスケール、二つ目は「早稲田の野球」の本質を見たいという本能的行為ではなかったか。どちらも間違いではないでしょうが、多分御大の真意は、飛田忠順から引き継いだアマチュア精神に帰着するのではないか。

その真意はともかく、御大はこの谷口五郎さんの指導方法の一つとしての「投手は投げるほど肩が強くなる」指導を固く信じたのでしょう。しばしば、初代一０００球ピッチングの対象にされた秋山登さんは、その強靭な肩でプロ入りも連投連投に十分耐えることができた、とのちに語っています。当時、明大ＯＢの長老である小西得郎さんや中沢不二夫さんなどは一０００球ピッチング練習には大いに苦言を呈したと言われます。

今でも、「投げれば投げるほど」肩が強くなるという指導法と、投手の肩は消耗品で「過重に投げるべきではない」という指導法があります。私はその指導法の是非ではなく、それを信じて「強靭な精神力」の培養を御大は求めたのだ、と推測します。一日一０００球ピッチング練習と簡単に言いますが、ざっと五時間はかかります。一人で黙々と投げ続けるうちに、周囲の状況も分からなくなるほど孤独感に襲われます。こうしたなかで肩の強靭さよりも、マウンド上でピンチに動じない強靭な精神力が培われるわけです。谷口さんからの指導法を御大なりに理解して実行したんでしょう。

これこそ、島岡「人間力野球」の本質です。

秋山先輩はのちに、あの一０００球ピッチング練習で自分自身、全く動じない精神力がつくられたと語っております。星野仙一も「あれだけやったのだから」という精神面について強調しております。鹿取義隆などは「オヤジさんに出会わなかったら、そしてあの一０００球ピッチング練習がなかったら、今の自分はないと思う」まで断言しております。そして、「野球の師であるが、人生の師でもあると感謝」しております。あの光沢毅さんでさえ肩の故障を隠して一０００球ピッチング練習に耐えたと言っておられます。孤独の中で投げ続ける練習 ― これこそ「人間力野球」だと感じた、とも。

と書いてあります。この文章に出てくる、飛田忠順（穂洲）さんはアマチュア野球の神様と呼ばれた方。小西得郎さんは戦前、名古屋軍（現・中日ドラゴンズ）監督などを歴任、１９５０年にセ・パ２リーグ分裂後の松竹ロビンズ監督としてセ・リーグ初代王者。中沢不二夫さんは初代のパリーグ会長で３人とも野球殿堂入りになった方々です。

今年の夏休みはかつてないほどの練習試合を経験しました。「あれだけやったのだから」負けるはずはない、いや、負けてはいけません。

自転車に乗ったままの“挨拶”ならん！

この前、私が作新学院大学野球部のマネージャーを連れて、オープン戦の打合せで明治大学に行きました。ＯＢであることは確かなんだけど、いまは他人様のことです。明大側の幹事長とかいう学生から「先輩、何か気がついたことがあったら、後輩のために、ぶん殴っても結構ですから注意してやってください」と言われても「いや、いや、わしらは今度オープン戦でお世話になるほうだから、それはできません」。

昔、明大野球部では自転車に乗ったままの挨拶はまかりならん！降りてしろ。また階段の上から、こんちは、とくれば、お前は目上の者に高いところから挨拶するのか、ここに降りてきてから挨拶しろ、それが礼儀だろ！と叱ったものです。そんなことを言わなければ本当はいいんですが、礼儀を教えるためには言わざるをえない。

この間も、うち、つまり作新学院大学キャンパスでもこんなことがありました。構内を歩いていると校舎の二階から「監督、おはようございます」と野球部員の元気な挨拶。私は即座に「オイ！お前はここに降りてきてから挨拶しろ。高い階段の上で挨拶する者がどこにおるか、お前、就職できてもすぐクビだぞ！」。

一時、企業が体育会系が欲しいというのは、礼儀、挨拶ができるからだった。そこには表面的な挨拶の奥に「こころ」がありました。いま各社ともそんな余裕はないんでしょうが・・・・・・。

と書いてあります。「挨拶」が大切なのは当たり前ですが、「こころ」があれば、しっかりとした挨拶ができるはずです。社会に出れば「挨拶」ができて当たり前です。